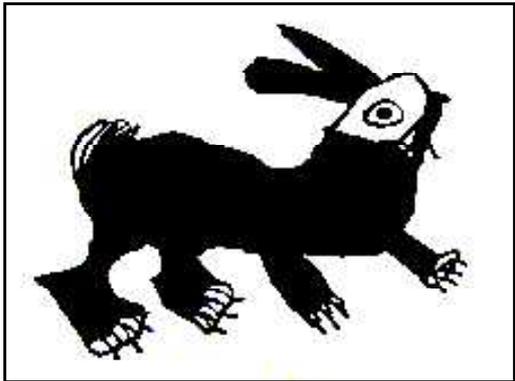
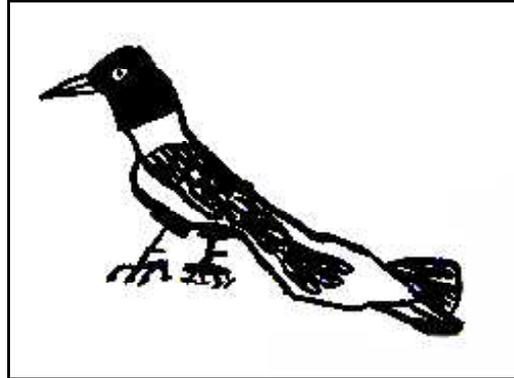
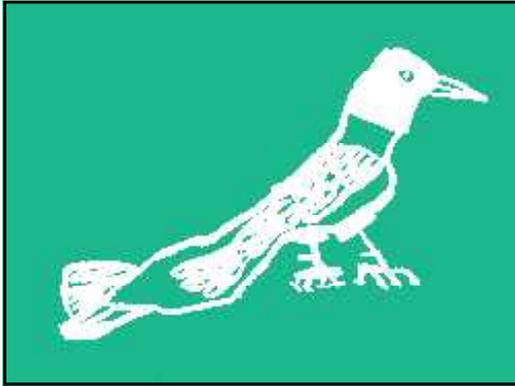


進路のしおり

～夢に向かって～



近年、ノーマライゼーションの理念の下、障害のある方が地域で活動するための条件が徐々にではありますが整備されてきました。それぞれの地域に暮らす方々や関係する諸機関の尽力のおかげで、共同生活（グループホーム等）の場が増えたり、障害者の就労支援に関する取り組みがマスコミに取り上げられる機会も多くなりました。

今回はそのような状況の中で、「夢に向かって」という副題の通り、障害のある方が新たな生活を送るための様々な挑戦を取り上げました。

<目次>

夢に向かって	P.1～2
想いを形に	P.3～6
地域支援	P.7～10
制度解説	P.11
施設紹介	P.12

- 埼玉県高等学校進路指導研究会 / 特別支援教育部会・肢体不自由特別支援学校小委員会
- 埼玉県肢体不自由特別支援学校進路指導研究会 ● 埼玉県特別支援学校校長会

電動車椅子サッカーを振り返って

電動車椅子サッカークラブ BLACK HAMERS

副代表 塩谷 亮太



僕は「筋ジストロフィー」という病気です。小学校までは地元の学校に通い、中学から高校卒業まで蓮田養護学校に通いました。現在はデイケアに通いながら放送大学を受講し、また電動車椅子サッカーというスポーツを楽しんでいる 23 歳です。

僕が電動車椅子サッカーを始めたのは、電動車椅子を作るときに業者さんに試合のビデオを見せてもらい興味を持ったことがきっかけです。さらに、養護学校の先輩から「サッカーをやってみないか」と誘われたことから、電動車椅子サッカークラブ BLACK HAMERS（ブラックハマーズ）に入会しました。

電動車椅子サッカーというのは体育館のバスケットコートで、1 チーム 4 人の選手が電動車椅子で自在に動き回りながら行うサッカーです。車椅子の先端に取り付けた専用のバンパー（鉄パイプで作られたもの）を使って、直径 33 センチ（13 インチ）のバスケットボールのボールよりやや大きめなボールを運び、キックし、ゴールに入れます。電動車椅子に乗っていれば年齢や性別に関係なく誰もが楽しめるスポーツです。

BLACK HAMERS は埼玉県で唯一のチームです。メンバーは筋ジストロフィーの人が主ですが、昨年からは県内の特別支援学校に通う脳性麻痺の中学生も参加し、楽しく、そしてチーム一丸となって全国大会を目指して頑張っています。

僕がチームに入って二年目ぐらいに全国大会に行くための予選がありました。5 位決定戦で勝った僕たちは第 6 回日本電動車椅子サッカーブロック選抜大会に出場するために、岡山に行くことになりました。

このとき僕たちは初めて新幹線に乗りました。僕が乗った新幹線は「のぞみ 700 系」で、指定された席は三人掛けシートの通路側を縦に二つ使ったところでした。父と母は窓側の席でした。サッカーの備品類は宅急便で送ったのですが、吸引器などの壊れると困るものは父がキャリアで運んでくれました。宿泊先は大会側が用意してくれました。また、宿泊先から会場までの移動も大会側が用意してくれた車に乗っていったのですが、僕は試合が終わった後は疲れてしまい観光する余裕はありませんでした。

大会の結果は 2 勝 1 敗、6 チーム中 3 位でした。このような経験はサッカーをやっていないと出来なかったと思います。

その次の年には第 10 回電動車椅子サッカー関東大会をチームが主管（実行委員会）として 1 年以上前から準備を始め、熊谷の体育館にて大会を開きました。その時は「ディビジョン 2」の試合に出場し、初優勝しました。会場には冷房はなく、その夏の最高気温が出た日で暑くて大変でした。

電動車椅子サッカーを通じて、いろいろな人と出会い、いろいろな経験が出来たことが良かったと思います。これからも全国を目標に練習に励んでいきたいと思っています。



Black Hamers Emblem



◆電動車椅子サッカーとは…

電動車椅子サッカー（パワーチェアフットボール）は、電動車椅子に乗ってプレーするサッカー競技です。1975年にフランス、1980年にアメリカ・カナダ、日本では1982年に誕生しました。以前は各国でルールが異なりましたが、2006年にフランスのルールに統一され、日本でも速度面以外は国際ルールに則って行っています。

バスケットボールのコートを利用し、1チーム4人（ゴールキーパーを含む）でプレーします。車椅子の先端に鉄製のバンパーを取り付け、13インチ（約33センチ）のボールを運んで相手のゴールをねらいます。電動車椅子の巧みな操作によるボールコントロールの技術や、チームの戦術・組織力が勝敗の鍵を握ります。

電動車椅子に乗っていれば、年齢や性別を問わず、誰もが同じ条件で楽しめるスポーツです！

《主なルール》

速度規定：電動車椅子は時速6kmに設定（国際ルールは時速10km）
 試合時間：20分ハーフ（休憩10分）
 ゲーム上のルール：①2on1（ツーオンワン）②ゴールエリア内ファール…などがあります。（詳しくはHPをご覧ください）

BLACK HAMERSでは選手とボランティアスタッフを募集しています！！

少しでも電動車椅子サッカーに関心がある方は是非一度練習を観に来てください。

連絡をお待ちしています！！



BLACK HAMERS のホームページ

<http://www.geocities.jp/blackhamers/>

（最新の大会結果や練習日程なども見られます！）

想いを形に

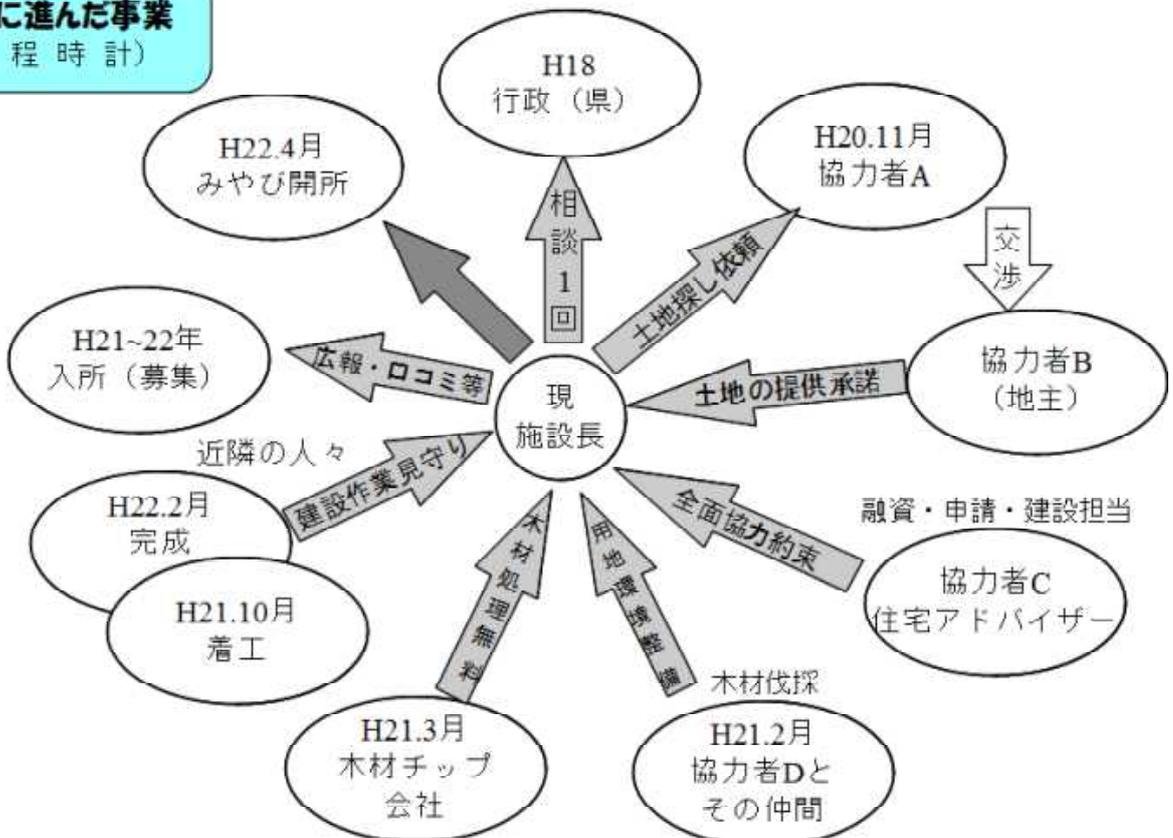
今だ! チャンスの神様がやってきた!!
母の強い想いが立ち上げた “ケアホームみやび”

秩父市内の米どころ、荒川の流れも近い小柱の地に建つ細長い新築の建物が“ケアホームみやび”です。道路沿いで、そのすぐ脇に田んぼや林があり、さわやかな風の通る所です。4月にオープンしたばかりで、内装には木材を多く使用し、車いすでも利用しやすい工夫を凝らした造りになっています。利用者は、中央にある食堂、居間、畳の部分の共有スペースを大変気に入っているようで、個室よりもここでくつろいでいることが多いそうです。



施設長は小澤眞里子さんで秩父養護学校を卒業した肢体不自由のお子さんのお母さんでもあります。秩父地域に肢体不自由児・者を受け入れてくれる施設が少なかったため、奮起され、ご自身で施設を立ち上げられました。当初スタートする時は、仲間もない状況で一人で行動を起こしたそうですが、協力者が現れてからは、トントン拍子に動き出したとのこと。その流れを下図にまとめました。

トントン拍子に進んだ事業
(事業工程時計)



周囲の方々の全面協力で順調に進む

もう後戻りはできない ～ みんなに背中を押されて一歩ずつ前進！！

想いを形に

一世一代の大事業

私（小澤施設長）の地元であり、多くの昔からの知人（親の代から）に見守られつつ、協力をいただき、短期間に一気に構想から完成まで進みました。

多少、弱気な気持ちでいたところへ“ここまできたら、もう後戻りはできねえなあー”“やるしかなかんべえー”と協力者たちに励まされ、この言葉でくじけそうな気持ちに火が付きました。“ああそうだよなあー”と自分で自分に言いかけ、気持ちを新たに頑張りました。



エピソード

建築中の建物が、平屋で横長の大きな物だったので、地元の人々は「ラーメン店」か「うどん屋さん」ができると思い、楽しみにしていたようです。

《 施設の概要 》

- 運営法人 特定非営利活動法人みやび
- 事業所の種類
 - 知的・肢体不自由者のための共同生活介護事業所（ケアホーム）
 - 知的・肢体不自由者のための共同生活援助事業所（グループホーム）
- 埼玉県障害福祉サービス事業所指定
平成22年4月
- 事業所定員
 - 共同生活介護事業所 7名
 - 共同生活援助事業所 2名
- 敷地面積 826.4㎡
- 建築面積 269.8㎡
- 従業員 9名 現利用者数 5名

地元住民との温かい交流

- ☆ 野菜・米などを届けてくれる。
- ☆ 散歩の途中に立ち寄ってくれる。
- ☆ 地元に住んでいる職員がいる。
- ☆ お茶を飲みに寄ってくれる。
- ☆ 地元の人々は、よく見守っていて話題によく出る。
- ☆ 地元や神社の行事のお知らせをいただき、できるだけ参加している。



今までに実施したイベント

- H22.5/5 バーベキュー大会
- H22.8/28 そうめん流し、花火大会
- H22.10/23 いも掘り、いも煮会



『重度重複障害者も自立した生活を！』

NPO法人 コットンドリーム理事長 綿 祐二
 (文京学院大学 人間学部人間福祉学科教授
 社会福祉法人睦月会 理事長)

NPO法人コットンドリーム

<http://cottondream.seesaa.net/>

想いを形に



「うちの子は重度の障害があるし、身体的にも知的にも重度だから自立した生活や、仕事をしてお給料をもらうなんて考えられないわ。将来、親がみられなくなったら施設に入るんだろう。」・・・きっと肢体不自由特別支援学校に通う保護者の方の多くがそんな風に考えているのではないのでしょうか？

4年ほど前まで当法人を立ち上げた保護者たちもそんな考えを持っていました。私達NPO法人コットンドリームは2007年に、富士見市・三芳町に住む和光特別支援学校に通う子どもを持つ保護者5組で立ち上げました。

和光特別支援学校には『地域実習』という生徒が住む地域で活動しようという日が年に1日あり、その活動の一環として『富士見市・ふじみ野市・三芳町』ではふじみ野市にある文京学院大学に交流を申し入れました。2006年に交流が実現し、その活動を通して「これからも地域の中でもっとたくさんの交流を持ち、生活に広がりを持って過ごして欲しい！」という想いが親の中でも強くなり、文京学院大学の中にあるNPO法人 Cotton Rings (コットンリングス) がその想いを受け止めてくれ『障がい児余暇支援活動 きらきら』が立ち上げられました。

『きらきら』では、月1回の文京学院大学に集って療育活動、それぞれの子どもに合わせた個別支援活動、そして設立した2006年から山中湖などでキャンプ(宿泊トレーニング)を開催し、親から離れて同年代の学生達と様々な活動をしています。特別支援学校と連携し学校からの自主下校なども学生と行き、買い物をしたり遊んだり楽しい時間を持つようになりました。訪問学級の子どもも大学に来て一緒に過ごしたり、家庭へ学生が出向いての交流などを行って来ました。地域の中の家族以外の重要な他者の存在があるだけで、生活が格段と広がっていきます。いつもはバスでまっすぐ帰る子ども達が、学生と一緒に道草などをして帰る。こんな当たり前のことをどんどん具現化していくのが Cotton Rings です。

そんな風に生活に広がりを持ち始めた子ども達を見て、保護者たちは「将来、学校を卒業しても、この笑顔を失うことなく、重度の子も社会とつながりを持った生活をして欲しい。重度の子も自立した生活を考えていっても良いのではないか？重度の子が自立することによって、それぞれの家族も個々の将来を安心して考えていけるのではないか？」そんなことを考えるようになっていました。

同じような想いを持った保護者5組が集まり、勉強会が始まりました。地域の現状をみていくうちに、入所施設は満杯で順番待ち状態、そして重度の子が生活に広がりを持って過ごせるような場所がこの地域にはないということを感じ、「ないなら自分達で作ろう！」とまずNPOを立ち上げました。

『自立』という言葉から思い描いたのはまず「重度重複障害のある人でも安心して暮らせるグループホームが欲しい！同年代の人と暮らさせてやりたいね。」ということでした。



法律が変わり、身体障害者でもケアホームが可能になっていますが、当時は地域に身体障害者のグループホームやケアホームはありませんでした。当時、設立メンバーの子ども全員がまだ特別支援学校に通っていたため、それほどどの焦りもなく、勉強会を重ねていました。そんな中2008年、私達が重度重複障害の子の保護者だけでNPOを立ち上げた事を知った方から、思ってもいないお話が舞い込みました。『一般企業からのお仕事』のお話でした。

お母さん達は“我が子達は重度、『お仕事』なんて無理無理！”最初はそんな風に思っていました。でも、こういう子ども達に、お仕事の話が来るなんて本当に貴重な事なんだと保護者のみなさんに話し、お母さん達にその企業に話だけでも聞いてくるように促しました。そのお仕事は、新座市にあるユニフォームレンタル・リネンのモビメント様が「会社の一角にある作業場を提供するので、そこでJリーグ大宮アルディージャの練習着・ユニフォーム一式を洗濯して欲しい。」というお話でした。練習や試合がある限り毎日の仕事でした。話だけ聞くつもりだったお母さん達も、実際にやっていけるのか不安はあったようでしたが、“子ども達に仕事の場を確保出来る！”という事が理解出来てきて、その仕事を請け負う事にしました。請け負う際、“重度の子ども達が通う場所にしたい”という事をお願いし、その作業場の運営は私たちに委ねていただける事になりました。慣れない『契約』もお母さん達にしてもらいました。企業側も最初は「重度の子？」とピンと来なかったようですが、今ではみなさんに可愛がっていただき、今年初めはホテルで行われた新年会に全員を招待してくださいました。また、アルディージャ様からもチームを支える一員と認めていただき、選手が作業場に来てくれたり、みんなでサッカーを見に行ったりもするようになり、スポーツから一番遠いと思っていた子ども達が、スポーツを身近に感じる事も出来るようになりました。



支えられるばかりだった子達が支える役割を得たのです。社会参加の第一歩です。最初はお母さん達で仕事をこなしました。まずは仕事で企業の信頼を得なくてはなりません。誠実な仕事を企業も認めて下さり、翌年4月、メンバーの子どもの中の最年長の鹿沼君が新入社員1号で入社しました。今年4月、2人目の社員の榎本君が入社しました。お母さん達だけでこの仕事を回すのはかなり大変という事と、仕事は親とは離れた方が良いだろうという事で、サポートに文京学院大学の福祉を学ぶ学生をバイトとして雇い一緒に働いています。まだ無認可作業所ですので会社からいただいた賃金でバイト代、2人の社員のお給料を支払っています。

そして、まだ特別支援学校に通う学生3人も、休日や長期休暇を利用して作業場に来て、作業に取り組んでいます。どの子もこの作業場に来ることをとても楽しみにしていて、最初は親の方が無理だと決め付けていた作業も、様々な工夫を加え、それぞれの子に合った支援をし、ファスナーを閉めたり、乾燥した品物を畳んだり、パック作業などをこなしています。現在働いている2名も、学生時代からこの作業場に通い、場や作業に慣れるという事を時間を掛けて行ってきた成果だと感じています。何より『仕事が出来るとの幸せ』を子ども達も親も、周りの人達も感じています。『重度だから無理』と決め付けるのではなく、どんな子もそれぞれ可能性を秘めていて、的確な支援と場を得て行く事が大事だと思います。そして、親達も夢を描き、一步を踏み出してください。そして、親達が面倒をみられなくなってからではなく、親達が元気で見守ってやれるうちに、もう一方の生活の場を確立してやりたいと思っています。地域や行政に働きかけをすると共に、自分達で出来る取り組みを考え、夢の実現に向けて頑張っていきたいと思っています。



さいたま市障害者総合支援センターについて

所長 山本信二

さいたま市障害者総合支援センターは、障害者の「就労支援」「生活支援」「授産施設等に対する支援」「社会参加支援」「発達障害者支援」などの各種支援を総合的に行う施設です。

1 事業の内容

(1) 就労支援：相談調整を行う支援係5名、雇用に向けて実習の段階から雇用後まで職場でルールやマナーを守り、仕事をうまくこなすための支援を行うジョブコーチ3名、事業所を訪問し、実習や就労の場の開拓を行う雇用創出コーディネーター2名、作業能力の評価を行うトレーニングコーチ1名を配置し、企業等への就労と離職予防のための様々な支援を行っています。また、パソコン操作や就職活動のための研修なども行っています。

(2) 生活支援：生活上の様々な問題について、障害者が身近な地域で安心して相談できるように、中央区障害者生活支援センターを設置し、併せて各区の生活支援センターを取りまとめる拠点としての役割を果たしています。



(3) 授産支援：市内の就労継続支援事業や地域活動支援センター等の障害者施設に①商品作りやデザイン、販売などの知識・技術を持った授産支援アドバイザーを派遣する②施設職員向けの研修会を開くなど、施設の自主製品を充実させ販売促進に結びつけることで、障害者の工賃の増加を目指した支援を行っています。

(4) 社会参加支援：地域生活をするうえで必要なルールやマナーを身につけるためのマナー教室、健康管理のための講座、趣味の講座などを行っています。

(5) 発達障害者支援：主に継続相談の対象として、広汎性発達障害等の18歳以上の発達障害者を対象に、生活、就労等の相談支援を行っています。



2 利用できる人

さいたま市民が対象です。障害者手帳をお持ちの方だけではなく、発達障害などで支援が必要な方の相談も受けています。

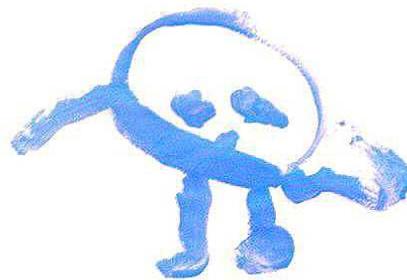


3 学校や施設などとの連携
 特別支援学校の高等部2年生、3年生を対象とした就職活動講座の実施や卒業後の支援を中心にジョブコーチ派遣などを行っています。さらに障害者施設や障害者生活支援センターなど関係機関からの相談も受け、連携して企業等への就労や離職予防のための支援を行っています。

4 各種講座等のお知らせ
 市のホームページ、市報等でお知らせいたします。

5 特別支援学校の皆さんからの質問
 Q ジョブコーチはどのような仕事をしているのですか。
 A 障害者の皆さんには、仕事に適應するための支援を行います。例えば作業の方法、課題の改善方法や職場での人間関係やコミュニケーションを改善するための相談なども行います。
 職場の従業員の皆さんには、障害を理解し、適切な配慮対応をすることや、仕事の内容や指導方法を改善するためのアドバイスを行います。

Q 年間の相談数、就職者数は？
 A 平成21年度は、相談件数 1,019件、登録者は 323名、うち就職者は 86名です。
 Q 相談したいときはどうすれば良いのですか。
 A 来所相談は予約制です。まず電話で相談をして下さい。
 (月～金 AM8:30～PM5:00)
 相談の内容を伺い、来所相談の日時を予約いたします。高等部3年在学中から卒業後の支援についての相談ができます。



□ 連絡先 □
 住所 〒 338-0013
 さいたま市中央区鈴谷 7-5-7
 代表電話 048-859-7255
 FAX 048-852-3272

《PTA さいたま地区合同進路勉強会について》

埼玉県立川島ひばりが丘特別支援学校 保護者 万年和枝

[5校に分かれたさいたま地区]

さいたま市の肢体不自由児は、現在、居住地域により、さいたま市立養護学校、県立越谷特別支援学校、県立和光特別支援学校、県立宮代特別支援学校、県立川島ひばりが丘特別支援学校の5校に分かれ、通学しています。

それぞれの学校において、PTA さいたま地区は活動を行っていましたが、平成19年5月、さいたま市障害者総合支援センターが開設し、この施設を合同で見学した後の話し合いにおいて、「各校 PTA さいたま地区に共通の課題である進路・就労について、話し合う場が必要ではないか？」ということになり、“PTA さいたま地区合同進路勉強会”が、始まりました。

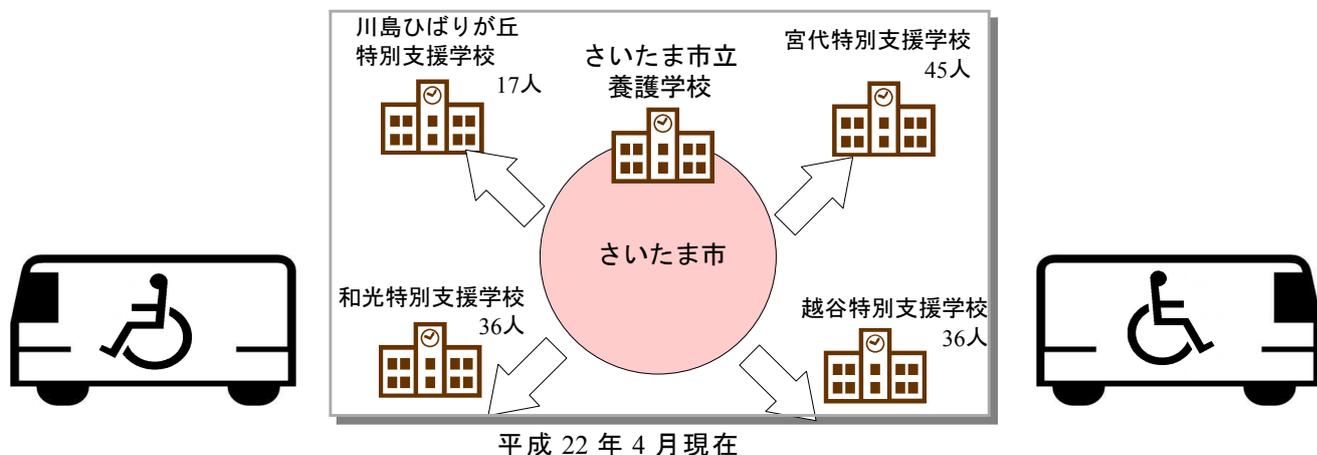
これまでもそれぞれの学校の地区

活動では、施設見学や市との話し合いなどを行ってきましたが、施設見学の結果報告や子ども達に必要な施設とは何かを、学校は違っても、同じさいたま市の障害児の保護者として考えていきたい、という思いが一つになり、当時の越谷養護学校、役員の方が中心になり始まっています。私は、役員だったこともあり、各校への連絡、日程調整、勉強会の進行などをお手伝いさせていただいていました。

年に一度、障害福祉課の方々をお招きして話し合っていますが、事前に話し合いを重ねてきているおかげで、活発な話し合いとなっています。

これまで、平成19年度は越谷養護学校、20年度は川島ひばりが丘養護学校、21年度は宮代特別支援学校、今年度は和光特別支援学校が担当校として企画・立案し、話し合

市外の肢体不自由特別支援学校に通う児童生徒数



いを進めてきました。初年度は、さいたま市内の進路・就労先について卒業生の進路先などを中心に話し合い、20年度は、平成21年度からのさいたま市の障害福祉計画にのせてほしい内容をまとめ、要望書を提出しています。21年度は、各校から施設見学の報告や卒業生の進路先、子ども達に必要な施設とは何かを話し合いました。今年度は、平成24年度からの障害福祉計画にのせてほしい内容を要望書にまとめ、提出する予定です。



[これからの合同進路
勉強会への思い]

福祉施設の整備には、時間がかかります。声をあげて、市の事業計画にのり、事業所の確定、計画、予算化、建設、開設まで最短で5年はかかると思われます。特別支援学校には、12学年の子ども達がいます。小学部の保護者が自分の子どもに合う施設がわかるまでは、時間が必要なこともわかります。しかし、施設の開設までの時間を考えて、早めに活動することも大切だと思いました。始めに声をあげた先輩保護者は、この合同進路勉強会で、その現実を少しでもわかっていただきたいと、合同の進路勉強会を始めています。これからも、同じさいたま市の子ども達の保護者が集うこの合同進路勉強会が継続し、活発な話し合いをしていければと願っています。



[要望書提出]

さいたま市から主障害が肢体不自由で5校に通う児童・生徒は、平成20年度時点で、183名。そのうち、医療的なケアを必要とする児童・生徒は45名でした。この人数のうち数十名が、毎年、卒業していきます。市内の進路・就労先が足りないことは明白です。そのため、平成20年度の要望書には、卒業生の数に見合う進路・就労先の整備、医療的ケアが必要な児童・生徒の就労及び、日中活動の場の整備をのせています。各団体からの要望もあり、平成21年度からのさいたま市の“障害者総合支援計画”に反映されています。



制度解説

「〇〇ホーム」とは？

障害者向けのグループホーム、ケアホーム及び生活ホームという名称を最近よく聞くようになりました。基本的には地域の中での自立した生活を目指すものであると考えられますが、具体的にはどのような施設なのでしょう。これらのことについて大まかに整理してみました。

名称	グループホーム (共同生活援助)	ケアホーム (共同生活介護)	生活ホーム
法的根拠等	障害者自立支援法	障害者自立支援法	埼玉県、およびさいたま市の単独事業
対象障害	身体・知的・精神 *さいたま市は知的・精神	身体・知的・精神	身体・知的
障害程度区分	1 および非該当の方	2以上の方	区分判定によらない
条件	介護の要らない方	介護を要する方	施設によって違う
定員等	基本は利用者6~10人に1人の職員体制	基本は利用者6人に1人の職員体制	施設によって違う
負担金	家賃、光熱水費、食費、日用品費、月5~6万円程度	家賃、光熱水費、食費、日用品費、月7~12万円程度	施設によって違う
	20歳以上は障害者年金や生活保護により、まかなうことができる場合が多い。*個人差があるので、各福祉課等へご相談ください。		
概要	地域での生活を確立するために、地域社会の中にある住宅（集合住宅や一戸建て等）において数人の障害者が共同で生活し、職員がその生活に必要な援助を行う。	主として夜間共同生活をしている住まいにおいて、入居中の障害のある人に入浴、排泄または食事等の介護、調理、洗濯、その他必要な生活上の支援を行う。	自立した生活を望みながらも、家庭環境や住宅事情によってそれができない身体障害者または知的障害者が居室その他の設備を利用するとともに、日常生活に必要な指導、援助を受けられる施設。

*利用するための手続きは以下のとおりです。

- ①居住地の福祉課等において、〇〇ホームの所在等を尋ねる。
- ②施設の見学をして利用相談をし、空き状況等について確認する。
- ③空きがあり、希望するのであれば居住地の福祉課等に申請する。
- ④この後福祉課の指示通りに手続きを行い、承認されれば利用開始となる。

空きが少ないので、希望すればすぐに利用できるわけではないようです。既存の福祉施設利用者のために同じ福祉法人内で設立し、利用しているケースが多いようです。早期から福祉法人等とのつながりを持つことが近道であると思われます。

嵐山郷 (障害者支援施設、知的障害児施設、重症心身障害児施設など) 埼玉県比企郡嵐山町古里 1848-1 電話 0493-62-6221

施設紹介



嵐山郷は昭和 51 年に埼玉県が設置し、現在は社会福祉法人、埼玉県社会福祉事業団が運営をしています。東京ドーム4個分にも及ぶ、緑豊かで広大な敷地の中に、自立支援法に基づく障害者支援施設(定員 329 人)、児童福祉法に基づく重症心身障害児施設(定員 60 人)、児童福祉法に基づく知的障害児施設(25 名)、医療法に規定する病院などの施設があり、知的障害児(者)及び重症心身障害児(者)の方が利用しています。利用者の日中活動としては、陶芸、さをり織り、バリ取り作業などを行っています。施設設置の目的は、知的障害者及び身体障害者の福祉の増進を図ることを目的としており、利用者ひとりひとりのニーズに基づいた、個別支援計画を策定し、「豊かで活力あるその人らしい生活」が送

れるよう支援するとともにケアホームの運営やショートステイ等、在宅障害者の支援にも積極的に取り組み、地域に根ざした施設を目指しています。嵐山郷への交通は JR 高崎線、熊谷駅北口から国際バス「小川町駅行き」や東武東上線の武蔵嵐山駅や小川町駅からバスが利用できます。

デイセンターウィズ (生活介護・就労継続 B 型) 埼玉県比企郡嵐山町大字鎌形 2804-1 電話 0493-63-0436



社会福祉法人昴は「共生社会の実現」を目指して平成2年にスタート。当初は児童通園からスタートし、発達相談の拠点としてのハローキッズなど地域生活に必要な施設を拡充してきました。デイセンターウィズは主にハローキッズに通っていた方々の卒業後の活動場所として平成7年に設立。周囲は嵐山溪谷も近い景色のよいところです。建

物も天井が高く開放的な雰囲気です。知的障がいの方の施設としてスタートしましたが、現在身体障がいの方も多く利用しています。生活介護 30 名定員、就労継続支援 B 型 10 名定員です。「ストリートスマート」「ホームボディ」2つのグループに分かれて活動し、前者はウォーキング、カヌーなど外に出て活動を行う時間を多く取っています。「ホームボディ」は午前にリラクゼーション、午後は「かき氷」「スイカ割り」といったイベントやゲームなど変化をつけて生活をしています。どんな活動をするかは支援計画を立てて決めています。単調になりがちな生活を様々な活動で楽しみながら毎日を過ごすところにこの施設の良いところを感じました。

埼玉県内肢体不自由特別支援学校9校
高等部卒業生の進路状況

年 度	2007	2008	2009
就 労	1	1	2
訓 練	3	3	6
福祉法施設	32	31	55
地域デイケア・地 活	24	12	12
進 学	1	2	1
在 宅	10	6	2
計	71	55	78

[訓練]

国立職業リハビリテーションセンター
東京障害者職業能力開発校など

[福祉法施設]

療護、授産、更生施設、自立支援法事業所
(含 生活介護、就労移行、就労継続等)

[地域デイケア施設]

県条例による小規模作業所
(定員6名から19名)

[地活]

地域活動支援センター

あとがき

■「進路のしおり」も今年度で第18号の発行となります。毎年、県内肢体不自由特別支援学校の進路指導主事の先生方を中心に編集、発行を行ってきていますが、今年度は蓮田特別支援学校が加わり、総勢10名の先生方で仕事を進めて参りました。

今回は「夢に向かって」という副題を設け、生徒たちの卒業後の生活に目を向け、卒業生たちの活躍や地域における障害者支援(地域支援)の取り組みを紹介しました。

余暇活動はケアホーム等の制度を通し、今後障害者の自立生活が更に進むにつれて重要な意味をもってくると思います。また、ここで紹介した様々な地域支援の有り様は、私たちの日々の指導を振り返る中で参考にしなければならないことがたくさんあるように感じます。本誌が少しでも多くの方々に読まれ、活用していただけることを切に願っています。

(川島ひばりが丘特別支援学校長 白井健次)

■今回も本誌の作成に当たっては、多くの方々よりご協力を頂きました。心より感謝申し上げます。

さて、ここ数年全国的に特別支援学校へ通学する児童・生徒の数が増えております。学校では様々な児童・生徒に合致した授業展開が肝心なことは言うまでもありませんが、卒業後の生活をイメージした指導を行うことも肝心であると考えます。本誌がその一助になれば幸いです。

今後も本誌では様々な取り組みを取り上げていこうと思いますので、ご意見、ご要望がありましたら各校の編集委員までご連絡ください。

(編集委員 高橋)

「進路のしおり」第18号

発行日 2011年3月15日

<編集・発行>

- ◇埼玉県高等学校進路指導研究会特別支援教育部会・肢体不自由特別支援学校小委員会
- ◇埼玉県肢体不自由特別支援学校進路指導研究会

岩沼 良純	県立和光特別支援学校 048-465-9770
台 秀彦	県立宮代特別支援学校 0480-35-2432
小池 正之	県立日高特別支援学校 042-985-4391
高橋 彰	県立川島ひばりが丘特別支援学校 049-297-7753
鈴木 弘	県立熊谷特別支援学校 048-532-3689
斉藤 武義	県立秩父特別支援学校 0494-24-1361
卜部 郡司	県立越谷特別支援学校 048-975-2111
尾形 正実	さいたま市立養護学校 048-622-5631
馬場 玲子	富士見市立富士見特別支援学校 049-253-2820
橋本 奈央子	県立蓮田特別支援学校 048-769-3191
表紙絵 高等部	3年 武井義和 さん (熊谷特別支援学校)

カットは各校の児童・生徒の皆さんにご協力いただきました。ありがとうございました。

協賛 埼玉県特別支援学校校長会

(印刷所) 「株式会社 エル・アートデザイン」

〒361-0023 埼玉県行田市市長野 635

TEL 048-555-0551 (代) FAX 048-553-2348